

氣樂者

『苦しいでしょ』

思ひ出したやうに律子は云った。

『え?』と茶箒笥の戸に手を掛けた儘振り向いたわぐりは、何の事やら一寸解せかねたらしい。

妊れる人の無意識につく息を、話の間々に苦しからうと思つて居た律子は、つひ今口に
出たのであつた。

『いゝえ』と視線がふくらんだ我帯のあたりに注いで居るのに初めて氣付いたらしく、目許で笑つて茶道具を取り出し乍ら、

『其麼でもないんですよ、私もねえ、もとお腹の大きな人を見るとどんなにか苦しいんだらうと思つてましたが、其麼でもないものですよ』

『さう』と幽に顎を引いて、火鉢の周圍を一撫で、火箸の所で止めて其手をかけて、

『貴女心細かあなくつて』

律子は何處までも、自分の心を他人に當はめる。

『それあ心細いことは心細いけれども、故郷へは歸り……：たくないし、お祖母さんでも上京れるんだといゝけれど到底駄目なんだし……：』と諦めてると云ふやうな口振り、無言つて茶碗を手に乗せて出して

『此家の伯母さんがね、親切にして呉れるんでいくらか心丈夫なんですよ』

全く心丈夫なのらしい。

歸省して昨日上京つた律子は、届け物かたがた今日この飯田町の奥にわぐりを尋ねた。祖母なる人の陰心配に、自分の思わくもこき交せて、七月と聞いた友の身の上を、如何する積りか知らと道々考へて來たのであつたが、來て見れば性分とは云へ案外平氣なもの、さすがに懐かしがつて聞く故郷の噂も、大方例の快活な笑ひに値するものばかりであつた。

『何て氣樂な人なんだらう！ 得だわねえ』と律子は思つた。

上京る前の日も、わぐりの家の隠居所に尋ねて、繰り返し繰り返し頼まれたことや、愚痴ごとを思ひ出した。

『祖母さんも大へん心配して居らっしゃいましたつけ』

多くは言はないで、たゞ思つた。

早生れなのでわぐりは律子より一つ多かつたが級は同じかつた。小さい時から無口で心

の引立たなかつた律子は親しい友達としては一人もなかつたが、誰にでも直ぐ仲よくなつてまた仲悪くなるわぐりと一度仲よくなつてからは、家の近かつた故もあらうが、不思議に、交りが親しくなつた。二人とも町家並に小學校だけでよして、一年違ひにわぐりは早く二本松の商家に嫁入つた。二年目の正月に里歸りしたまゝ、一年半ばかり隠居所に暮したわぐりの云ふ所によると、嫁入先の姑は夫の繼母で常々折合が悪うい、殊に自分が嫁つてからは猶更激しかつた、それで夫は今家に居ないと云ふ。姑をよく言はないは勿論のこと。

東京に出て某會社の書記の役とかを見付けた夫からの手紙を受取る度、わぐりは獨り住みの寂寥さを感じた。淋しさに堪えられなかつた。生れるとから手しほにかけた祖父祖母は、其様な邪見な家にはもうやらぬと云ひ、東京へは猶更やらぬ、暮してゆけるか、其麼弱い躰で如何するのだと、いつかな肯かぬ。

わぐりは弟が、時として現る食客扱ひに、輪をかけて自分が上京心を募らせた。猶、其頃不幸にも夫に死に別れて家に歸つて居た律子に、輪に輪をかけては居づらがつて、同情心を買つて、そしてその同情心では益々己が上京心を確かにした。間もなく弟嫁が決つた際に、祖父祖母を説きつけてわぐりはつひに上京した。また一年後れて裁縫學校に入學した律子が尋ねた時は、早や可なりの東京通になつて居た。

狭い乍ら一軒の家を持つて居た時も、子供のない綺麗好きな上役の家の二階に住んで居た時も、この陰氣臭い狭苦しい座敷住居にも、尋ねる度に律子はいつも快活なわぐりの笑ひを浴びる。夫は今某商店に通ひ番頭の身の上だとやら。

『いゝ柄だこと！ 赤ちゃんのに？』

起ちながらふと目に止つた隅に押し遣られてたメレンス友禪を目顔でさしていふ。

『いゝえ、襦袢の袖が切れつちやつたんで、それにでもせうかと思つてねえ、福切れの中にあつたんですよ。さうねえ、子供のもそろそろ用意しなくちやあならないわねえ』

『何處まで氣樂なんだらう！』

律子はまた自分の心にひきくらべた。

送り出した座敷に戻つたわぐりは、竹の皮の八の字になつてゐる鶯饅頭の黄な色を見て、蓋とつて見た鐵瓶の湯氣の熾なを見ると、戸口にむけて冴えた聲。

『伯母さん居らっしゃいなお茶いれますから』

『へい有難う』

やうやうに立膝をおろすと、減り氣味の湯はちーんちーんとなり出した。

底本…「水野仙子全集」第一卷

初出…「女子文壇」明治四十一年二月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年九月十日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)